

## 1P25

## 未就学児をもつ父親の育児に関する国内文献検討

清野 星二、廣瀬 幸美

三育学院大学

## 【背景】

未就学児の養育は子どもとの交流やしつけだけでなく、身体的世話のニーズも高い。父親の育児に関する研究は増加傾向にあるものの、父親の育児が十分に進んでいるとは言えない現状にあり、未就学児をもつ父親の育児における研究動向を明らかにすることは重要である。

## 【目的】

未就学児をもつ父親の育児という観点から先行研究を概観し、今後の課題を明らかにする。

## 【方法】

医学中央雑誌Web版とCiNiiを用いて検索語を「父親」「育児」とし、「未就学児」と「乳幼児」を検索語にそれぞれ組み合わせ過去10年（2010年から2020年）の原著論文を検索した結果、158件の文献が抽出された。文献の抄録を精読し、研究対象者が父親であり、育児に関して述べられている一次文献、全28件を分析対象とした。

## 【結果】

研究対象は父親のみが14件、父母が14件であり、子どもを研究対象に含めた研究はみられなかった。子どもの発達段階別では幼児5件、乳幼児20件、乳児・幼児の判断がつかない未就学児が3件であった。

記述内容に関しては、《育児の現状とその関連要因》《父親の心理》《育児支援プログラムの評価》に分類された。

1)《育児の現状とその関連要因》では8件が分類され、主な支援者は母親であり、子どもに対して身体的世話や社会性を促す行動をとっていたが、父親の育児休業利用は少なく、収入を得て家計を支える役割を重視していた。核家族、母親が就労、労働関連時間が12時間未満、未就学児の数が多い場合には、父親の育児が多いことが報告された。

2)《父親の心理》では17件が分類され、ウェルビーイングや育児肯定感といったポジティブな側面からだけでなく、育児ストレスや抑うつといったネガティブな側面からも検討がされていた。

3)《育児支援プログラムの評価》では3件が分類され、プログラム参加後は育児ストレスが低下し、育児分担、育児技術の自立においては有意に高くなった。

## 【考察】

未就学児をもつ父親の育児では、育児ストレスや抑うつといったネガティブな報告もされている。身体的世話や子どもの社会性を促す行動に加え、家事や仕事を含めた多重課題を、育児休業の利用が少ない父親が担うには困難な現状が示唆された。父親の育児を推進していくためには父親の育児を多様な側面から捉え、子ども、母親、父親にとってバランスのとれた育児を支援する必要性が、今後の課題として示された。

## 1P26

## 小児科医と助産師と地域ボランティアの協働で創る産後～1歳児の親子の居場所作りの実践

福井 聖子<sup>1</sup>、中井 民<sup>2</sup>、岡山 真央<sup>3</sup>、丸橋 敏江<sup>4</sup><sup>1</sup> NPO法人小児救急サポートネットワーク・NPO法人はんもっく<sup>2</sup> ゆい助産院<sup>3</sup> 助産院にじ<sup>4</sup> 丸橋助産院

## 【緒言】

1～2歳児の子どもの運動機能や対人関係の発達には、地域での遊び場や家族以外の人との関わりが重要であり、当団体は親子遊びを中心に子育て支援のボランティア活動を行ってきた。しかし近年、他人との関わりに抵抗感を持つ母親が増加、さらにコロナウイルス感染対策のため、地域コミュニティを活用できず孤立する状況を感じるようになった。地域の助産師からは、母親の育児力の劣化や育児不安への危機感が伝えられ、0歳児からの支援を目指すこととした。

## 【目的】

助産師と小児科医と地域ボランティアスタッフ（以下、スタッフ）が協力して、0歳児の母子が安心して人と関わることのできる居場所作りを実践し、子育ての現状と課題・支援のあり方について検討したので、報告する。

## 【方法】

福祉系助成金を受け、0～1歳児の親子を対象に戸建住宅で毎週火～金曜10～15時に小規模のオープンスペースを開催した。週3日は助産師が常駐し、小児科医は適宜参加、運営はスタッフが担当した。オープンスペースは無料、並行して、子育て講座・ヨガ・ベビーマッサージなどを有料で定期開催した。電話やオンライン相談は随時、助産師と小児科医によるオンラインテークを月3回開催した。こういった取り組みを通じて、コロナ禍における育児の現状について課題を整理し、「切れ目のない子育て支援」を行うための助産師と小児科医・専門職とスタッフの連携について、課題と方法について検討した。

## 【結果】

活動を通じて、一見大きな問題がない母親でも、頼る人がなく、迷いながら子育てをしている人が少なからず存在した。コロナ感染対策により、産科入院中は個室で過ごし、退院後のフォローの機会は激減、高齢世代との交流を避けて実家を頼れないなど、孤立は進んでいると感じられた。参加者には、当初表情が固く子どもをかわいいと思えないという人もいたが、回を重ねるにつれて表情が和らぎ、他の参加者との交流も認められた。助産師は母体や新生児のケアに、小児科医は乳幼児の発達に専門性が高く、スタッフは共感力や生活情報に強みを発揮し、協働の有効性の相互評価は高かった。

## 【考察とまとめ】

出産直後は専門職への信頼感が強く、コミュニティの重要性が認識されることは少ない。母親の孤立防止・地域のつながり作り・乳児の発達支援などの総合的支援を行うためには、安心して関わる人との出会いが有用であると考えられた。